二〇一六年度　入学試験問題

法学部A方式Ⅰ日程・文学部A方式Ⅱ日程・経営学部A方式Ⅱ日程

二限　国　語　（60分）

〈注意事項〉

一　試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。

二　解答はすべて解答用紙に記入しなさい。

三　マークシート解答方法については下記の注意事項を読みなさい。

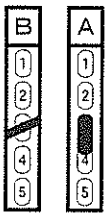
マークシート解答方法についての注意

マークシート解答では、鉛筆でマークしたものを機械が直接読みとって採点する。したがって、解答はＨＢの黒鉛筆でマークすること（万年筆、ボールペン、シャープペンシルなどは使用しないこと）。

一　記入例　解答を3にマークする場合。

(一)　正しいマークの例

(二)　悪いマークの例



枠外にはみださないこと。

○でかこまないこと。

二　解答を訂正する場合は、消しゴムでよく消してから、あらためてマークすること。

三　解答用紙をよごしたり、折りまげたりしないこと。

四　問題に指定された数よりも多くマークしないこと。

〔一〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

二〇一四年十二月十四日に行われた衆議院議員総選挙における小選挙区の投票率は五二・六六％と、戦後最低だった前回の総選挙における投票率をさらに六％以上下回り、これを由々しき民主主義の危機として取り上げる声が各所で上がった。確かに有権者の半数近くが棄権という選択をしたことが重大であるということは間違いない。

ここでもし、単に投票率という数字を上げたいというだけであれば、オーストラリアやベルギーのように義務投票制と棄権に対する罰則を導入すれば簡単だが、政治への関心や政策についての知識を持たない有権者を強制的に投票に行かせることが望ましいのかという別の問題が浮上することとなる。[1] 棄権に対する罰則を設けたことにより九〇％程度の投票率が確保できれば、上昇した四〇％分の投票の中身は、あみだくじで決めたものであっても、候補者の容姿だけで決めたものであっても構わないと考える人は少ないであろう。

つまり、有権者は単に投票に行くのみならず、政策について理解した上で投票を行うことが求められるのだが、これは決して簡単なことではない。仕事や家事などで忙しい日常の合間をヌって、常に政治状況を注視し続け、各党や候補者の政策についての立ち位置を把握した上で、自らも金融緩和や消費税増税や集団的自衛権、憲法改正といった政策に対する意見を持ち、自らの立場にもっとも近い政党や候補者を選択するなどということが多くの有権者にとって可能なのだろうか。

このような文章を書いている私自身も、正直に言って政策や各政党の立ち位置について完全に理解した上で投票を行うことができているかといえば怪しい。もし、それが求められるのならば、自分には選挙において投票する資格があるとはとうてい思えないので、次回の選挙からは棄権せざるを得ないだろう。

それでは、その程度の人間が選挙や政治の研究をしているなどといって恥ずかしくないのか、実はあまり恥ずかしくないのである。民主主義はどうあるべきかを考察する規範的な研究はともかくとして、現実の有権者を対象とした社会調査データを用いた研究が示してきたことは、古今東西を問わず、有権者は非常に乏しい政治知識しか持っていないということである。

たとえば、一九六〇年に出版された選挙研究の金字塔[ii]ともいえる『アメリカの有権者』およびそれに続いて一九六四年に出版されたコンバースの論文において示されたことは、多くの有権者は政策争点に対する真の態度を持っていないということであった。一般の有権者たちは政治の専門家のように複数の争点に対する態度を統合するイデオロギーのような明確な軸を持っていないために表明される意見はバラバラであり、しかも、調査に回答するたびに場当たり的に意見を作り出すため、同様の政策について同様の人物が年度を跨いで質問を受けた場合の回答が大きくばらついていたのである。民主主義の「本場」のひとつであるアメリカにおいて、その前提となる有権者の政策に対する意見の信頼性が危うい[2]ことを示したコンバースの研究は衝撃を持って受け止められ、統計学・社会調査法・歴史など、さまざまな観点から反論が試みられたが、コンバースらの研究を根本的にクツガエ[B]すような知見、あるいは当時に比べて有権者の政治理解が大きく改善したという知見は得られていない。

コンバースらの研究は、あくまで現状の問題を指摘したものであり、今後事態が改善する可能性がないとはいえないが、経済学を応用した選挙研究は、この将来に対する期待すら打ち砕く。経済学における合理的な人間像を元に選挙を捉える試みはダウンズによって始められたが、その後ライカーとオードシェックによって精緻化された[3]「R＝P×B－C＋D」という式が、有権者の投票の有無を決定するモデルとして広く受け入れられている。左辺のRは投票によって得られる報酬(R: Reward)であり、これがゼロよりも大きければ有権者は投票し、そうでなければ棄権する。Pは自らの一票が投票結果を左右する主観的確率(P: Probability)であり、Bは自分が投票する政党や候補と対立候補の政策から得る利益(B: Benefit)の差である。これらを掛けたP×Bが、有権者が一票を投じることによって得られる利益であり、これが投票にかかるコスト(C: Cost)よりも大きければ左辺Rはゼロよりも大きくなる。しかし、選挙に関わる有権者の規模を考えると、自らの一票が選挙結果を左右する確率は限りなくゼロに近いため、コストだけが残り、合理的な有権者は投票には行かないということになる。つまり、投票がもたらす利益という観点からいえば、冒頭で述べた五二・六六％という投票率は低いどころか驚異的な高さである。このように「R＝P×B－C」の式では、現実の選挙における投票率がゼロでないことを説明できないため、投票義務感(D: Duty)という項が設けられる。この項は、義務投票制が採用されていなくとも、有権者は投票に行かなければならないという義務感

を抱いており、投票に行くことで有権者としての義務を果たし、満足感を得ることができるということを表している。つまり、投票に行くことで個人が利益を得ることはできないため、義務感によってようやく支えられているのが有権者の投票だということである。

このように選挙に関する知見に触れることによって「有権者は選挙には行くもの」「有権者は政治に関心を持つべき」という当たり前のように語られる言説が、実は脆(もろ)いものであるということを実感させられる。結果として、自分が政治にそれほど興味を持ってこなかったことも無理からぬことであるなあ、などと思うわけだが、もちろん、自らの政治に対する理解のなさを正当化してくれる研究に出会ったからなどという後ろ向きな理由で、この分野における研究を続けているわけではない。私が惹きつけられたのは、前述の知見が提出された後の選挙研究の方向性に、である。民主主義にとっては致命的ともいえるコンバースの研究に対する直接の反論が断念された後、乏しい知識しか持たない有権者が不完全な情報に基づいていかに「正しい判断」を行っているかという政治的ショートカットについての研究が隆盛した。また、ダウンズに始まる経済学を応用した研究においても、有権者が情報入手や判断のコストを抑えて政治に参加するメカニズムについての研究が同時に行われた。このように、現実の有権者は民主主義の理想に比べると非常に低レベルで不完全な存在ではあるが、それでもなんとか民主主義を成立させることはできないかということを考える選挙研究に希望を感じたのである。

ライカーとオードシェックのモデルに見られるように個人にとっては投票に行くことがもたらすメリットは小さい。しかし、自分だけが投票を行わず他の多くの有権者が投票するフリーライド*が得であっても、多くの有権者が投票しない状態に陥ると社会の大多数が損害を被るという一種の社会的ジレンマ状態にある以上、投票率の低下は食い止めるべきであろう。具体的には、一部の限られた人々、とくに強固な基盤を持つ組織に所属する人々や極端な政治的態度を持つ人々のみが政治に参加するような事態となれば、有権者の大多数を無視してでも、彼らの方を向いた政策を掲げることが、政党や候補者の利益にかなうようになってしまう。

しかし、前述の通り、有権者が政治に関心を持つことは決して当たり前のことではない。そこで気がかりなのは、政治に関

わるためのハードルをあまりに高く設定することが、かえって人々を政治から遠ざけるのではないだろうかということである。民主主義は有権者の努力なくして支えることができないものであることは確かだが、[4]日常の糧を得るための仕事を奴隷が行っていた時代の市民に求められる役割を、現代の有権者が演じることは不可能である。では、現代の有権者にとって現実的な役割とは何だろうか。これについては、シュドソンの「監視する市民」という概念を参考にすることができる。彼はアメリカにおける民主主義の歴史について検討する中で、政府の役割が拡大し、政策の専門性が増している現代社会における市民の役割として現実的なのは、重要性の高い政策争点について、メディアなどを通じて伝えられる専門家の解釈を参考にしながら、話し合い投票を行うことで、個人や社会が脅かされるような事態に対してケイショウを鳴らすことだという。日常の細かい政策についてはD政府にイニンしていても、人々が緩やかな関心を持っており、ひとたび重要な問題が浮上すれば多くの有権者が行動を起こすという社会であれば、政府は有権者を無視して暴走することはできない。真に危ないのはすべての政策について詳細に理解する理想的な有権者が少ないことではなく、まったく政治に触れない有権者が増加することである。

すべての市民が高い政治的関心と知識を持つことを想定することは一見平等で民主的であるように見えて、非現実的なまでに高いハードルを設けて、それに達しない者を排除するならば、むしろエリート主義をもたらし、有権者は投票に行くべきと訴える人々が望む政治とは真逆の方向に向かってしまう可能性がある。「選挙に行こう」「政治に関心を持とう」と訴えるとき、それが本当に届くべき人たちに届いているのかということを省みる必要があるのではないだろうか。

（稲増一憲の文章より。ただし、一部を改変した）

【注】＊フリーライド　ただ乗りすること。

問一　二重傍線部A～Dのカタカナを漢字に直して解答欄に記せ。

問二　二重傍線部i・iiの意味として最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

i　「由々しき」

ア　危険な問題なので誰も触れたがらない
イ　放置しておくと大変なことになる
ウ　あまりにも深刻で人々に絶望をもたらす
エ　もはや隠しとおすことのできない
オ　多くの理由が積み重なった

ii　「金字塔」

ア　金では買えないほど価値のある教え
イ　その時代の話題の中心となる流行の書
ウ　永遠に残る優れた業績
エ　正しい指針を示した良識の書
オ　誰もまねできない個性的な研究

問三　傍線部1「棄権に対する罰則を設けたことにより九〇％程度の投票率が確保できれば、上昇した四〇％分の投票の中身は、あみだくじで決めたものであっても、候補者の容姿だけで決めたものであっても構わないと考える人は少ないであろう」とあるが、この表現を通じてうかがえる筆者の考えを説明したものとして最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　政策に対する理解の深くない有権者を強制的に投票に行かせるくらいならば、投票率は現在の水準で維持されることの方が望ましい。

イ　有権者を強制的に投票に行かせ、高い投票率が確保されるならば、有権者が政策以外の判断材料で投票することをある程度容認する必要がある。

ウ　大事なのは有権者が政策を理解して投票することであり、強制力を使って投票率を高めることは問題の本質的な解決方法にはならない。

エ　棄権に対して罰則を導入するときには、有権者が卑近な方法、判断材料にもとづいて投票することへの罰則の導入も、同時に検討しなければならない。

オ　そもそも有権者は卑近な方法、判断材料でしか投票できないのだから、すべての有権者を投票に行かせるという考えには問題がある。

問四　傍線部2「有権者の政策に対する意見の信頼性が危うい」とあるが、そのようになってしまう事情を端的に表した部分を本文中から二十五字以上三十字以内で抜き出し、その最初と最後の三字を解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

問五　傍線部3「R＝P×B－C＋D」という式」が意味するところを説明したものとして最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　選挙に関わる有権者の規模が大きければ、有権者が持つ一票の価値は下がる。そうした状況では、有権者は政党や候補者が掲げる政策から受ける恩恵に期待を寄せるよりも、情報入手や判断にかかる労力の大きさの方を考えてしまい、棄権が増える傾向となる。そのことを考えると、一定の投票率を維持している今日の状況は驚異的というほかない。

イ　投票によって得られる「報酬」があると判断した場合、有権者は自分の投じる一票に期待を寄せて、自分に利益を与えてくれる政党や候補者を支援するために投票に行く。だが、「報酬」がないと判断した場合、有権者は情報入手や判断にかかる負担感と、投票に対する義務感とのせめぎ合いのなかで、実際に投票に行くかどうかを判断することになる。

ウ　自らの一票が結果を左右すると感じられる選挙では、有権者はたとえ情報入手や判断にコストがかかったとしても、自分にとって都合のよい政策を掲げる政党や候補者に一票を投じるために投票に行く。だが、実際にはそのような選挙はないに等しく、選挙は投票に行かなければならないと感じている少数の有権者によって維持されているといえる。

エ　有権者が投票に行くかどうかは、自分が支持する政党や候補者と他の政党や候補者の政策の違いが大きいか否かにかかっている。そのような違いがない場合には、有権者は情報入手や判断に労力を割いてまで投票に行くのは無意味だと考える傾向にあり、投票に行くのは特定の政党や候補者に投票する義務感を持っている人々だけに限られてしまう。

オ　有権者の規模の大きな選挙では、自分の一票が政党や候補者の運命を決定する確率が極めて低いため、多くの有権者は仮に特定の政党や候補者を支持している場合でも、情報入手や判断にかかるコストの大きさの方を考え、棄権しがちになってしまう。そうしたなかで、かろうじて選挙を成り立たせているのは、有権者の投票に対する義務感といえる。

問六　傍線部4「日常の糧を得るための仕事を奴隷が行っていた時代の市民に求められる役割を、現代の有権者が演じることは不可能である」とあるが、それはなぜだと考えられるか。その理由の説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　余裕のある立場でじっくり政治に向きあうことのできたかつての市民に対し、現代の有権者は日々の暮らしに追われているため、政治に絶えず注目し、考えるゆとりを持たないから。

イ　奴隷の労働によって余裕ある生活を送っていたかつての市民と異なり、現代の多くの市民は一部の資本家によって使役される奴隷のような立場に転落してしまったから。

ウ　日常の糧を得ることが困難であった時代とは異なり、現代では生活水準が向上し、有権者は政治に対して強い関心と深い知識を持たなくても豊かな暮らしを営むことができるようになったから。

エ　もともと政治に対して強い関心と深い知識を持つことができたのは時間に余裕のある一部のエリートだけであったが、現代ではそのようなエリート主義は否定されているから。

オ　奴隷制度の残っていた時代の市民は社会のエリートとしての自覚を持っていたのに対し、奴隷制度がなくなった現代では市民はエリートとしての自負も見識も失ってしまったから。

問七　本文の内容と合致するものをつぎの中から一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　コンバースやダウンズの研究によって明らかにされたように、多くの有権者が棄権することは、理想的な民主主義に対する有権者のレベルの低さに起因するものだから、そのレベルの向上を図る努力が必要になってくる。

イ　多くの有権者が棄権する傾向が強まると、政党や候補者は一部の限られた人々に有利な政策を掲げることになってしまい、結果として社会の大多数が損害を被ることにもなるため、投票率が下がることは憂慮すべき問題である。

ウ　有権者が政治に関心を持つのが当たり前のことではないという点を踏まえれば、棄権が増えるのはやむをえないことであり、むしろどのような選挙でも一定の投票率が維持されていることにこそ希望を見いだすべきである。

エ　多くの有権者が棄権してしまうことの原因は、候補者や政党の「選挙に行こう」「政治に関心を持とう」という訴えが有権者に届いていないことにあるのだから、今後はその訴えがいかにすれば有権者に届くのかをよく考える必要がある。

オ　多くの有権者が棄権している現状では、政策は強固な基盤を持つ組織に属する人々や極端な政治的態度を持つ人々によって左右される恐れがあるため、有権者には多岐にわたる政治課題をひととおり理解し、判断する力が求められる。

問八　波線部「確かに有権者の半数近くが棄権という選択をしたことが重大であるということは間違いない」とあるが、筆者はこうした状況のなかで、これからの選挙においてはどのように対応してゆくことが必要だと考えているか。四十字以上五十字以内で解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

〔二〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

現代は科学の時代である。科学的法則が明らかになった時代に、素朴に呪術を信じることは難しい。神様の奇跡を信じることも、世界の出来事の中に神様の意図を読み取ることも、次第に困難になってきている。今日でも、創世記に神が六日間で世界を造ったと書いてあるから、進化論はウソだと頑張る人がいるが(とくにアメリカで)、結局のところ、彼らの主張も年とともに次第に留保のたくさんついた言い訳じみたものになりつつある。

しかし、世の中から宗教色が後退したのは、必ずしも科学の発展によるものではない。いきさつはもっと複雑だ。

まず、何といっても、諸宗教のありようが具体的に比較できるようになったということがある。これは人類学者、社会学者、歴史学者、そして宗教学者の功績である。そして交通機関やメディアの発達のおかげである。昔のクリスチャンが仏教徒のことを、人生は迷妄だなどというわけのわからん教えを信じながら千本もの手のある偶像を拝んでいる悪魔教徒だと考えていたとしてもしょうがなかったかもしれない。しかし、キリストを信じていなくても大震災に際して公正に振る舞っている日本人の姿がインターネットを通じて世界中に配信される時代において、そんな［A］な信念を保持することは不可能だ。こうして自己の信念が相対化されていくと、やはり昔の人のようには、素朴に自らの伝統に思い入れることはできなくなるだろう。

濃い信仰の持ち主はともかく、薄い文化のレベルで宗教が相対化していくのは避けがたいことだ。

第二に、社会が個人主義化していっているということがある。人々が伝統の権威としてあれこれの教えや戒律を受け入れ、それが社会の連帯を促していた時代と、人々が個人的に人生や世界の意味について探究し、個人的に答えを得る——得たつもりになる——時代とでは、宗教の実質的な意味が大きく変わっている。いつの時代にも人間は人生について深い問いを発することだろうし、そういう意味では宗教が無くなることはないかもしれない。だが、[1]宗教の具体的な形を保持することは次第に難しくなってきている。これは、比較的保守的なイスラム教徒の場合においてさえ、そうなのだ。

第三に、今日の自由思想や人権思想が、次第に宗教的ライフスタイルに対して厳しい目を向けるようになってきている。何

を信じてどう行動するのも当人の勝手であるが――信教の自由――、共同体や家族がそうした行動や習慣を共有することをめぐっては、［　B　］が無かったかどうかが常に精査されるだろう。

一昔前であれば、宗教家が貧者のためにひと肌脱いだというだけでも、世の人々はその聖なる意思に感服したものだが、今日の宗教家は、助けを求める病者や貧者に向かって、教えを垂れたり祈りを勧めたりすることにも、だいぶ慎重にならなければならない。病気で死にかけている、そしてこれといった信仰のない病人に、「祈りましょう」と勧める暇があったら、医薬品を用いるなり手術を受けるなり、とにかく治療に専念させることのほうが先決なのである。

第四に、今日の宗教家もまた、資本主義の原理と新規の科学テクノロジーの世界に生きざるを得ない。これのどこが問題になるかというと、伝統的な宗教の理想というのは、資本主義のライフスタイルともテクノロジー主体の社会システムとも異質な、どこか［　C　］な、人と人との、時間をかけた付き合いのようなものを前提としているからである。実際、仏教の悟りを得るには、長い間戒律を守ったり座禅を繰り返したりしながら、コツを先輩から学び取っていくしかない。イスラム教徒としての生活もまた、その世界の先輩の知識や知恵を拝借して――そうした知識の豊富な学者たちがウラマー*である――少しずつ自分の生活を律していくところにポイントがある。

保守的な宗教家がいつも「一昔前」のライフスタイルを守ろうとしていることに目を向けてほしい。彼らは決して古代人のように暮らそうとしているわけではないが、ビジネスだのテクノロジーだのに追い立てられる前の暮らしが、宗教家の理想となっている。日本で言えば映画『ALWAYS三丁目の夕日』(二〇〇五年)が昭和三十年代の「人情の世界」を理想化してみせたのと同じ感覚である。アメリカにあるアーミッシュというキリスト教の宗派はもっとすごくて、電気も使わず自動車も使わない。イスラエルの正統派の一部のユダヤ教徒は、一九世紀あたりの東欧社会の服装を守っている。

しかし、そんな宗教家の世界も、資本主義の競争原理とテクノロジーのイノベーションから逃れられない。彼らは常に矛盾にさらされている。神仏の救いの世界は、金の計算のようなみみっちいことからフリーであるはずなのに、宗教家もまた勢力拡大のためには市場調査をぬかりなく行なわなければならないし、もっと積極的に霊感商品を高く売りつけて儲けている霊能

家たちもいる。

自分たちの宗教的世界を防衛しようとすれば、多かれ少なかれ閉鎖的にならざるを得ないが、思想の点で閉じれば「原理主義」になるし、空間的に閉じれば文字通りのカルトとなる。そして「攻撃が最大の防御なり」路線に転じれば、今度は実際に武器で防衛する教団も出てくる。しまいにはミサイルを持ったり化学兵器を開発したりする教団まで出てくる始末だ。彼らの矛盾は、他の点ではまったく保守的であろうとしているのに、テクノロジーの使用に関しては――兵器であれインターネットであれ――、まったく先進的である点である。彼らが力を持とうと持つまいと、[2]宗教的に混乱していることは間違いない。

ざっとこんな有様だ。宗教家は――ここで言っているのは主に濃い信仰者たちのことだが――、現代社会において、ますます不安定で矛盾した状況に追い込まれているのである。これは、「科学が発達したから神様が信じられなくなったのだ」というほど単純なものではない。科学よりももっと広い、社会システム全体の変化という文脈から見ていく必要がある。

以上の概観からわかることは、現代社会においてなお宗教を求める人たちが盛んに現われ続けていることと、現代社会において宗教が次第に成り立ちにくくなってきていることとが、同じ理由を共有していることである。

現代社会のシステム――それは資本主義、テクノロジー、個人主義等々の現代的価値より出来上がっている――は、何がしか人間からゆったりとした時間を奪い、人間をシステムの歯車にしつつある。そうだからこそ、それとは原理を異にする宗教的ライフスタイルを求める人たちが跡を絶たないのだ。しかし、まさしく資本主義などのシステムが今日の強力なリアリティになっているために、いくら宗教的なライフスタイルを維持しようとしても、穴だらけのものにならざるを得ないのである。

これが現在、私たちの地球社会において、宗教なるものが置かれている状況だ。[3]神仏はこうした状況をどう見ておられるのだろうか。

宗教について問うということは、結局、世俗の社会とはいったい何なのかを問うことに帰着する。そしてそれは、宗教に興味のある人ばかりでなく、興味のない人にも決して無縁とは言えない問題である。

そういう意味で、宗教とは何かを問うことは、万人に対して開かれた問いなのである。

（中村圭志の文章より。ただし、一部を改変した）

【注】＊ウラマー　イスラム教における学者・宗教的指導者のこと。

問一　空欄 A B C に入る語として最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

A　ア　自由奔放　イ　手前勝手　ウ　融通無碍　エ　牽強付会　オ　単純明快

B　ア　意思の強要　イ　迷信の存在　ウ　奉仕の意識　エ　偽善の自覚　オ　自我の逸脱

C　ア　牧歌的　イ　円環的　ウ　遊戯的　エ　耽美的　オ　神話的

問二　傍線部1「宗教の具体的な形」とあるが、それは宗教のどのようなあり方と考えられるか。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　相対化されてしまった薄い文化のレベルでの宗教ではなく、濃い信仰にもとづく絶対的な宗教のあり方。

イ　キリスト教や仏教、イスラム教などの間の関係のように、相互の差異が明確に見出せるような宗教のあり方。

ウ　交通機関やメディアが発達する以前の人間関係のなかではぐくまれた、比較的保守的な宗教のあり方。

エ　人生や社会の意味に対する問いかけを、社会全体の問題として捉えかえし解決しようとする宗教のあり方。

オ　人々を従わせるようなはっきりとした教義や戒律をもち、人々の社会的な結びつきを強める宗教のあり方。

問三　傍線部2「宗教的に混乱している」とあるが、その「混乱」とはどのようなことか。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　自分たちの宗教的世界を守ろうとすれば閉鎖的にならざるをえず、思想の点で閉じれば「原理主義」、空間的に閉じればカルトになってしまう、ということ。

イ　現代社会においては宗教家が熱心に布教しようとすればするほど、資本主義の競争原理とテクノロジーに依存せざるをえなくなっていく、ということ。

ウ　今日の宗教家は伝統に従った理想的な生活を求めるが、それとは矛盾する現代の資本主義の原理と科学テクノロジーから逃れられない、ということ。

エ　宗教の世界は、憎しみや争いとは無縁のはずであるが、現代社会においてはミサイルや化学兵器をもつ宗教教団まで存在している、ということ。

オ　ビジネスやテクノロジーの支配する資本主義の中で、現代の宗教家は伝統的ライフスタイルの意義を見失い戸惑っている、ということ。

問四　傍線部3「神仏はこうした状況をどう見ておられるのだろうか」とあるが、筆者の意図するその表現上の特徴の説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　答えるはずのない神仏に問いかけるというフィクショナルな設定によって、現代の宗教問題は現実から遊離したリアリティのない観念的な課題であることを暗示する表現となっている。

イ　穴だらけにならざるをえない現代の宗教的なライフスタイルについて、その信仰対象たる神仏に問うという機知に富んだ表現をすることで、宗教者を非難する表現となっている。

ウ　現代人にとっての宗教の意味を問うという問題の切実さ、深刻さを、擬人的に神仏に問いかけるという形式をとることで緩和しようとするユーモラスな表現となっている。

エ　これまでの宗教に関する考察を受け、その信仰の対象であるはずの神仏に問いかけるという皮肉をこめた表現によって、議論にひと区切りつけようとする表現となっている。

オ　考察の対象としている宗教における信仰対象そのものに問いを投げかけるという修辞的な表現によって、世俗的な観点から考察することの必要性を示す表現となっている。

問五　波線部「いきさつはもっと複雑だ」とあるが、その「いきさつ」とはどのようなものか。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　交通機関やメディアの発達が個々の宗教に相対化をもたらし、人々の個人主義化が宗教による社会の連帯を希薄化させ、さらに自由主義や人権思想が宗教に対する束縛から人々を解放し、その一方で現実的には宗教家もまた資本主義の原理やテクノロジーと無縁ではいられなくなり、宗教が変質した、ということ。

イ　さまざまな宗教の相対化をもたらした近代社会の個人主義思想は宗教から伝統と権威を奪い、さらに自由思想や人権思想は信教の自由を人々にひろめ、一方で資本主義の競争原理とテクノロジーのイノベーションは宗教のあり方にも影響を与え、宗教が人生についての深い問いに答えられなくなっている、ということ。

ウ　現代ではメディアの進歩や宗教についての研究によって諸宗教は相対化され、そのうえ自由主義や人権思想が信仰を個人主義化させ、共同体における宗教的権威の失墜を招いたために、現代宗教は資本主義の競争原理や科学のテクノロジーから距離を置くようになってきた、ということ。

エ　インターネットや交通機関の発達のもと諸宗教は相対化され、社会の個人主義や自由思想は人々に宗教の伝統的権威に対する疑いをもたせ、さらには現実のほとんどの宗教家も現代の資本主義の原理やテクノロジーを時代の趨勢として積極的に利用し、本来の宗教のあり方とは隔たってしまった、ということ。

オ　諸宗教を比較できるようになったことが宗教の相対化を生み、個人主義は人々に宗教の伝統的権威を疑わせ、自由思想や人権思想は信教の自由に人々を目覚めさせたが、一方で宗教の側でも資本主義やテクノロジーと無縁ではいられず、伝統的宗教を否定するに至るという宗教的矛盾におちいっている、ということ。

問六　現代社会のシステムが宗教と人間の関係にもたらした変化はどのようなものであると筆者は考えているか。三十字以上四十字以内で解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

〔三〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

*中山の大臣と聞えける人、*宰相成頼と契りて、常に出仕の友なりけるが、宰相、にはかに道心おこして、出家して、*高野に籠居せられたりける所へ、大臣、*外記大夫といふ者の、ものに①心得たるを使ひにて、出家のあはれさなどいひやるさまに②て、かの住み家の指図[a]をくはしくせられけり。

さて、*中山の入りに、かたはらの山ぎはに、③ただそのままなる庵室を作り立てて、大臣も出家して、そこに住み給ひけるに、宰相入道のもとへ、「たしかなる使ひ給はりて、申すべきことあり」といひやられたりければ、あやしと思ひて、おこせたるに、させることはなくて、「これらにて見まはれ」とばかりありけり。畳のへり、障子のありさまで、たがふところ④なかりけり。帰りて、[1]そのよしを入道に語り申す。笑ひて、「*上品上生の*大渓山のたたずまひは、[3]うつしにくくこそ」といはれけり。また、「[4]宰相に見えむとてこそ、出仕のたたずまひもまめなり[c]A」とこそ、大臣のたまひけれ。

（『十訓抄』より）

【注】
*中山の大臣　藤原忠親。
*宰相成頼　藤原成頼。
*高野　高野山のこと。
*外記大夫　「外記」は太政官の役職の一つ。「大夫」は五位の称。
*中山の入り　現在の京都市左京区岡崎の中山の入口付近。
*上品上生　極楽往生の九つの階級における最上位。
*大渓山　高野山を極楽浄土の山にたとえたもの。

問一　傍線部①「心得」②「に」③「ただ」④「なかり」の品詞として適切なものをつぎの中からそれぞれ一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。ただし、同じ記号を重複して選んではならない。

ア　名詞　　イ　動詞　　ウ　形容詞　　エ　形容動詞　　オ　連体詞
カ　副詞　　キ　接続詞　　ク　感動詞　　ケ　助詞　　コ　助動詞

問二　傍線部a「指図」b「させる」c「まめなり」の本文中の意味として最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

a「指図」
ア　指揮　　イ　図面　　ウ　地図　　エ　道順　　オ　命令

b「させる」
ア　指示する　　イ　すべき　　ウ　大した　　エ　必要な　　オ　やらせる

c「まめなり」
ア　活発である　　イ　上品である　　ウ　正確である　　エ　繊細である　　オ　精勤である

問三　空欄 A に入る助動詞「き」を正しい活用形にして、解答欄に記せ。

問四　傍線部1「帰りて」は、誰が誰のもとへ帰るのか。その組み合わせとして最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　中山の大臣が、宰相入道のもとへ帰る。
イ　中山の大臣が、外記大夫のもとへ帰る。
ウ　宰相入道が、中山の大臣のもとへ帰る。
エ　宰相入道が、外記大夫のもとへ帰る。
オ　外記大夫が、中山の大臣のもとへ帰る。
カ　外記大夫が、宰相入道のもとへ帰る。
キ　使いの者が、中山の大臣のもとへ帰る。
ク　使いの者が、宰相入道のもとへ帰る。

問五　傍線部2「そのよし」とは、どのような内容を指すか。二十字以上三十字以内の現代語で解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

問六　傍線部3「うつしにくくこそ」の解釈として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　模造するのは醜いことだろうよ
イ　描くのは苦労することだろうよ
ウ　建て直すのは大変なことだろうよ
エ　描写するのは面倒なことだろうよ
オ　真似るのは難しいことだろうよ

問七　傍線部4「宰相に見えむとて」の解釈として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　宰相に会いたいと思って
イ　宰相に確かめたいと思って
ウ　宰相に認めていただきたいと思って
エ　宰相に気に入られたいと思って
オ　宰相にご覧になっていただきたいと思って

問八　『十訓抄』と同じ時代に成立した説話集をつぎの中から一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　徒然草　　イ　古今著聞集　　ウ　大和物語　　エ　今昔物語集　　オ　日本霊異記